

人で創作をなさろうとしていたものだった。一昨年、お二人を車にお乗せして、狭山市の様々な所を訪れた。池原先生はその都度車を降りて、さねとう先生に、ここにはどんな言い伝えが有って、このような妖怪が相応しいのではと、ご自分がお描きになった原画を先生にお見せになった。先生はその話に耳を傾けながら、時折質問をし「ふむふむ」とうなずいておられた。

◆永遠に

最後に先生の言葉から、作品に寄せる深い想いをお伝えしたい。

子ども達に本を選ぶとき、また語って聞かせる時に、この先生の言葉を心深く刻んでおきたい。先生の作品は、人が生を紡ぐ限り、永遠に褪せる事は無い。

「**壮大で華麗でどこか人為的な〈大テーマ〉よりも、不滅の光芒を放って燃焼しつくす〈生の瞬間〉を赤裸にしたほうが、幾増倍も雄弁に〈コトバにあらわせない真実〉を伝えるのではないのでしょうか。…子どもたちに、〈硬直した教訓〉…などが、それほど重要なのではないでしょうか。…読者の一人一人に〈その人にとってのテーマ〉をみつけたすよろこびを味わってもらいたいと、…それが真実の文学であるという、トンカチでなぐられたってへこまないわたしの信念があるからです**」（…は、割愛部分）



さねとう あきら 先生と ふるさと狭山

さねとう あきら(本名・実藤 述 1935年1月16日-2016年3月7日)

東京で生まれる。早稲田大学演劇科中退。劇団「仲間」に参加。児童劇『ふりむくな ペドロ』の脚本で劇作家デビュー。1972年に創作民話集『地べたっこさま』で日本児童文学者協会新人賞・野間児童文芸推奨作品賞を受賞。児童文学にも筆を染める。1979年に『ジャンボココの伝記』で小学館文学賞、1986年に『東京石器人戦争』で産経児童出版文化賞をそれぞれ受賞。

1986年狭山市水野に居を移す。

戯曲『のんのんばあとオレ』(水木しげるの原作)で2008年度 斉田 喬 戯曲賞 受賞。『ゆきこんこん物語』『神がくしの八月』『なまけんぼの神さま』『かっぱのめだま』など創作・評論多数。

2001年2月開催

第1回 狭山市民芸術祭
プログラムより

郷土愛の源として

さねとう あきら

二十一世紀の始まりを期して開催する、狭山市文化団体連合会の第一回市民芸術祭にふさわしい演じ物はないかと相談を受けたとき、わたしは即座に「狭山市二千年の歴史」を題材にしたらと、申し上げました。

実はわたしも、十五年ほど前に市内に転入した「新市民」ですが、恥ずかしながらこの町の歴史については、ほとんど無知でした。やはり、この土地になじむには、その歴史を知らなければ、と痛感していましたので、『狭山いまむかし』のような劇づくりを提案したわけです。

言い出しっぺで、わたしが脚本づくりを担当することになり、郷土史にくわしい先生方の教えをうけて、あちこち取材したのですが、調べれば調べるほど、興味深い事柄が発掘されて、思わず興奮させられました。この際、新たに狭山市民となられた方々にも、このように長い歴史を秘めた町であることを知ってもらい、この劇が郷土愛を育てる源になったら幸いです。

第1回 狭山市民芸術祭

ページェント劇 『狭山いまむかし』

プロローグとエピローグのある9景

脚本・構成・演出

さねとう あきら

序の章 化石林は見た = 序詩〈化石林は見た〉

第1部 道の章 = 入間黎明太鼓 入間川合戦踊り 清水冠者義高

第2部 土の章 = 獅子(鹿)舞幻想 鳥狂言〈鷹場の鶴〉 狭山お大尽節

第3部 炎の章 = 大空へのあこがれ その日笹井は戦場になった 復興の唄

終章 これから2000年 = 歌〈これから2000年〉 (作詞 さねとう あきら)